

現代における「こころとからだ」

--- 特集へのイントロダクション ---

水 野 信 義

はじめに

本特集は 2 つの意味を持っている。本紀要編集委員から特集について、「こころとからだ」という社会福祉学部 1 年生向け講義科目のゲスト講師を中心に原稿を書いてもらいたいという依頼を受けた。その関係でお願いをした方もあり、学生相談関係でお願いした方もある。すなわち心身問題について論文という意味と一部「こころとからだ」という講義についての紹介という意味があるかと思われる。

そして筆者には上記のようなゲストエディター的な役割と総説的な内容の文章を依頼された。ところが、筆者としては最近の心身問題をレビューするには時間も能力もなかったので、結局講義科目の「こころとからだ」についての紹介をさせて頂くことにした。そして精神医学を中心として私に分かる範囲で、少し長めのイントロダクションを書くことでもう一つの任を果たさせていただきたい。総説としてはやや不十分で、また筆者が目を通せなくても重要な文献とされているものは本の題名を紹介したこと、従ってやや読書案内的になってしまったが、できるだけ一般の人が手に入りやすいものを挙げたことをお断りしたい。

1. 心身問題を扱う 4 つの立場

心身問題は大きく分けて、4 つの流れがあると言える。1 つは心身相関や心脳関係を探るもの(主として医学的方法をとる)、2 つ目は心が体に表れるものだが、体が心を象徴している場合(精神分析的方法となる)、3 つ目は体の中に心や社会を読むもの(主として哲学や社会学の立場)、4 つ目は心身のコミュニケーションの立場である。ただ 4 つ目はやや実践的なものであり、上記 1~3 の応用とも言える。これらの考え方について以下に若干説明するが、順序としては心身相関の立場から述べる。さらに「個別問題」として、通常の意味での客観的身体を扱っていても、例えば医学・生物学の研究の進歩により心理学的、社会的に身体の意味が変化せざるを得ないものについても若干紹介したい。

1) 心身（脳）関係について

a. 心身相関の立場

1 つは心身相関を考える立場で、現在も心身医学の主要テーマである。主に心療内科学、ストレス学、免疫学などで臨床医学的、基礎医学的研究がなされている(河野友信ほか,1999)。最近の傾向で言えば「精神免疫学」などは 1 つの傾向であろう。例えば神庭 (1999) は『こころと体の対話 - 精神免疫学の世界』の中で、ストレスが免疫能を低下させて、癌が発症しやすくなることなどを述べている。精神医学でいえば、従来心因性の障害とされたパニック障害 (不安神経症) や強迫神経症を神経伝達物質との関係でとらえようとする研究などは心脳問題を扱っていると言えよう。また PTSD (心的外傷後ストレス障害) の際に脳のある部分に器質的な変化が見られるというのは、心脳関係における心身医学ということになる(『精神科治療学』特集, 1998 など)。ここで言う心身相関とは多くは「心から体への影響」という視点からの論述になる。

なお心身症になりやすさを考える際に、競争心が強く、時間に追われて生活する「タイプ A 行動パターン」が虚血性心疾患になりやすい点で問題にされるが、アントノフスキー (1987) は、逆にストレスに強い傾向を、把握可能感、処理可能感、有意味感などの要素からなる「首尾一貫性」SOC という概念で捉えようとする。本学の吉井清子氏らの訳業になるその本の紹介はストレス学と فرانクルらの実存分析などをつなぐ上で参考になるものである。

ついでに私自身は学んでいないが、PTSD に有効とされる EMDR (眼球運動による脱感作と再処理法) という不思議な治療法は、往復眼球運動を用いた認知療法方法で、過去の外傷的記憶の主観的障害感が減るというものであるが、これは体 (眼球運動) から心への影響と言えよう(市井雅哉ほか, 1999)。

b. 心脳関係

狭義の医学では、脳神経解剖学者養老猛の『唯脳論』(1997) に代表されるように、心の現象 (心理・行動) を脳の機能として捉える。この立場は古くは大脳病理学として、近年では神経心理学として脳の高次機能の研究から出ている考え方であろう。やや古くなったが、ゴールドシュタイン (1933) やシルダー (1923) (後に述べるメルローポンティは彼らの提示した事例に基づいて心身論を展開した)、そしてルリア (1972) らは訳書もあり、わが国にも良く知られている。

こうした高次機能障害の例については、一般向けに書かれたものとして、映画「レナードの朝」の原作者で神経内科医のオリバー・サックス (1985) や、ラマチャンドランら (1988) は幻影肢を含む様々な例を紹介しており、人間を考える上で参考になる。しかしこの分野の紹介は、本学にはりハビリテーション医でもある二木氏など他に適任者があるのでこの位にとどめたい。氏にはむしろ関連した映画の紹介をお願いすべしかもしれない (二木立, 1992 など)。また脳の高次機能研究の権威である情報社会学部の久保田競氏には幾つかの一般書 (1982, 1985) もあることを付け加えておきたい。

最後にやや系統が異なるが、解剖学を基礎にした三木成夫 (1983) の特異な身体論について一言だけ追加したい。三木はすでに鬼籍に入ったが、人間を含む身体器官の形態や機能の中に、長

い進化の間の「生命記憶」というべきものが保持されているという雄大な身体論を展開する（現代思想 22-3, 特集「三木成夫の世界」1994）。

2) 象徴としての身体

もう1つの流れは、精神分析学におけるいわば「象徴としての身体」である。フロイトはすでに抑圧された無意識的な心的葛藤が身体に現れるものとして、ヒステリー研究をしており、精神分析では心身症的な症状は、象徴として解釈された（フロイト, 1895）。ちなみに「ヒステリー」という用語の語源は女性の「子宮」を意味しており、子宮が動くことによってヒステリーが生じると考えられていた古代ギリシャの医学を反映している。そのため近年女性差別につながるとして国際疾病分類（WHO, 1992）では解離性障害と呼ばれる。一方アメリカ精神医学会（1994）の『DSM - 精神疾患の診断統計マニュアル第4版』では、意識や記憶の症状が出る「解離性障害」と身体の症状を示す「転換性障害」に分けているので複雑である。その他、ヒステリーに限らず、神経症や心身症を、こころの葛藤の象徴ととらえる考え方があった。例えば、心因性嘔吐について、「心理的に呑み込めないことを表している」というように解釈された。しかし最近では、神経症も心身症も葛藤やストレスが脳の医学的なメカニズムを通して発現すると説明され、象徴という考え方が少なくなっている。その中ではヒステリー（解離性障害、転換性障害）はなお象徴的な解釈が妥当性があると思われる。例えば突然婚約者から一方的に破棄された女性が失声症になったのは、「話したくないという無意識的拒否を表している」というように了解できる。もっともこれも神経学的な抑制メカニズムから説明することもできよう。

また先述したように神経症一般、とくにパニック障害や強迫性障害については最近では脳の各部位における神経伝達物質との関係が研究されている（例えば貝谷久宣, 1997など）。なお精神分析のラカン派の身体論については、南淳三（1995）ほかの論文を収録した雑誌『イマーゴ』の特集を参照されたい。

3) 身体に心を読む立場

a. 現象学的身体論

心と体の関係は、哲学では永遠のテーマなのであろう。ブリースト（1991）はデカルト以来の哲学者の考え方を簡潔にまとめている。観念論や現象学の専門家だという彼自身は「結論としては、心身問題の解決とは、思考とは脳の心的な活動であり、経験とは物理環境の現象学的変換である、というものである」とする。少し遡れば20世紀前半に展開されたフッサールの現象学は身体論にも大きな影響を与えたと思われる。そのような現象学的身体論の白眉としてメルロー・ポンティの『知覚の現象学』（1945）が著されたと言えよう。この哲学の流れは精神医学、とくに精神病理学と言われる分野に大きな影響を与え、独特の身体論が展開された（ピンスワンガー、ボス、ツット、クーレンカンプなど）。しかし筆者の浅学のゆえに、まとまった総説が見当たらず

ないのは残念である。強いて言えば「精神の科学1」の笠原（1984）による概説であろうか。例えば精神分裂病の症状として「自分の腸に穴があいている」という妄想に表されている身体は、客観的身体（Körper）とは異なる主観的身体（Leib、「生きられる身体」）の問題として説明された。身体の中に心が含まれているというか、「身体としての私」というような立場になる。

なお木村敏（1994）は心身問題にもふれながらワイツゼッカー（1940）の心身医学論を紹介している。なおこれこそ古いのが、『人間と動物』『女性』という訳書（1970、1977 共にみすず書房）が出ているポイテンディク（Buytendijk）には『人間学的生理学序説』（1967）という興味ある著書がある。翻訳されないまま、医学的内容が古くなってしまったが、現象学の立場からは紹介してほしいものであった。

哲学では、市川浩（1975）の『精神としての身体』がわが国では現象学を踏まえた包括的な論考であろう。市川（1984）はさらに『身^みの構造』も著している。70年代、80年代には身体論が盛んであり、湯浅泰雄には東洋的身体観を取り入れた『身体 --- 東洋的身心論の試み ---』（1977）があり、湯浅慎一には『知覚と身体現象学』（1988）がある。先述した養老孟司には『日本人の身体観の歴史』（1996）という著書があり、その中で上述した市川浩のほかにも、大森荘蔵（1982）『新視覚新論』、坂本百大（1986）『心と身体 --- 原一元論の構図』、廣松渉（1985）『身心問題』、等を取りあげているが、このあたりの紹介は私の能力を超えている。

その後はさらに身体論も広がり、演劇や舞踏における身体も含めた論議がされるようになった（小阪修平 [編] 『身体という謎』1986）。また『オルガン』という雑誌特集「甦えるフェノメノロジー」（1989 / 1999）でも竹田青嗣「エロスの現象学」が身体に触れている。

最近ではこうしたやや柔らかな身体論が多くなっていると言えよう。東大出版会の「越境する知」シリーズの『身体：よみがえる』（1998）は「共生する身体」「聖母の身体」「合理化運動」の中の身体、「身体の武術的転換のために」「建築する身体」などのテーマが続く。また『環』という雑誌の2001年7月号で「歴史としての身体」という特集を組んでいる。「女性を『脱構築』で切り刻んではならない！」はフェミニズム批判であり、「公共化する身体」は臓器移植をめぐる論考、「身体感覚をとりもどす」は竹内敏晴らによる鼎談、といった内容である。さらに唯物論研究協会編（2001）の『こころとからだ』という年誌6号にはさすがやや硬い「デカルト心身論の可能性」「こころ・からだ・脳そして自己・人格」、「スポーツと身体と教育」、「心の哲学・序論 --- マルクス主義的アプローチ」といった論文が並んでいる。

b. 社会学的身体論

身体の中に制度や規範が組み込まれていることは、よく論じられているが、市野川（2000）は、『身体 / 生命』という小著の中で M. フーコーの「生 - 権力」という概念を援用しながら、身体が歴史的に権力によって影響を受けているとする。かつての古い権力は「死なせるか、生きるままにしておく」という方法をとったが、近代以後の生-権力の立場は「生きさせるか、死の中へ廃棄する」という方法をとるといふ。大沢真幸には大著『身体の比較社会学』（1990、1992）がある。「¹」では大沢は自然性と合致している、物質に同化した身体を「原身体性」と

呼び、知覚行動にかかわる「過程身体」と、規範とかかわりがある「抑圧身体」という概念を取り出す。さらにフロイトのシュレーパー症例における「他者」体験を踏まえながら、多数の抑圧身体が統合されることにかかわる「集権身体」を想定し、パラノイアにあっては「神」などというように切り離しが生ずるとする。一方「 」においては、原始共同体における「生成する身体」として「文化=儀式など意味の体系」「交換する身体」「王の身体」等へと拡張されていく。筆者は今回大まかな文脈を追ったに過ぎないが、こうした考察は身体の中の他者性、制度などを様々な位相において捉える際に有用であろう。

一方ジェンダー論からのアプローチがある。この系列はいわゆるバイオフェミニズムという立場も含めて、フェミニズムからの論説が多い。筆者がまとめる能力はなく、フェミニズムからの総論が必要だと思われる。目についたものとして高橋さきの(1997)は、「身体/生体とフェミニズム」という論文で、社会学では「からだ」という用語ではなく「身体」という用語が用いられているが、最近の生殖技術や移植医療などの「新」科学技術によって問題にされる身体は「生体」といった方がよいと述べている。すなわち「生体部品化」ないし「生体の商品化」といった事態が進んでおり、はては「生体のサイボーグ化」すら現実になりつつあるという。(このあたりについては、後に少しトピック的に取りあげる)。

一方フェミニズムではジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル』(1990)が有名だという。雑誌『環』の特集で、バトラーに批判的な立場をとるパーパラ・ドゥーデンの論文で知ったが、「ジェンダーはパフォーマンスである」として異性愛そのものを抑圧とするバトラーの著書はドイツの学生にも人気があるという。ドゥーデン(2001)は身体史の立場から、近代に起こった「脱身体化」、(パーパラ流の脱構築もその展開とみなされる)について批判的である。その立場からすると、技術による身体の植民地化が問題とされる。例えば彼女は生殖医療によって女性の体が単なる胚の発育環境として利用される事態について批判している。(これはフーコーの立場につながる。詳しくはドゥーデン 1994 参照)。

このジャンルに入れて良いかどうか迷うが、文化人類学の中で、身体が論じられることがある。例えば波平恵美子(1988, 2001)は医療人類学という分野を紹介している。波平によれば、身体は当該文化のシンボル体系の中に組み込まれており、多重の意味をもつ存在として認識されているという。例えば身体に何らかの障害が生じたとき、それは個体の内部だけの変化ではなく、その人と周囲の人々との関係性において、あるいは神や精霊や野生の動物や先祖の霊との関係において異常が発生したととらえる考え方である。近代的な科学的身体観と共に私たちの中にもこうした身体観は生きている。死についても例えば波平(1988)が挙げているように、日航機の事故の際、遺族は五体満足であの世に送るために遺骨を探しまわったが、これは日本人にとって当たり前のことである。

4) 心とからだのコミュニケーションの立場

心身相関でなく、禅宗などでいう、心身一如という考え方もここに入れるべきであろう。あるいはボディワーク、ヨガなどの考え方もここに入れても良いかもしれない。このあたりは演劇から派生して「からだことばのレッスン」を行っている竹内敏晴（1990 など）らが早くから手がけて来た領域であろう。近頃は背中が丸まって前かがみになっている子どもが増加しているというが、教育の立場から、最近からだを問題にしているのは、斉藤孝（2000）である。かれは自らヨガや武道などを通して得た体験から、伝統的な「腰肚文化」「丹田呼吸法」などの大切さを主唱している。（そういえば戦前には学校教育で「修身」なる科目があった）。なお教育と身体については、様々な論議があるようだが、まず竹内の言う「レッスン」は、それだけで完結する惧れがあると批判する池谷壽夫（1992）の論文を挙げておく。池谷の論文には佐藤みちよ「身体論の位相」（1988）、菅孝行『関係としての身体』（1981）が挙げられている。佐藤は教育における身体を扱っているが、「健全なる」（対極として異常がおかれる）身体というときの「対象となる身体」、儀式や運動会などの際の「集団としての身体」、学校では教師－生徒関係などで浮かび上がる「対他関係としての身体」が挙げられている。そして竹内のいう「レッスン」もここに含まれることになる。そして竹内のいう「人間の開放」とされているものが、西欧口ゴス主義の優位性の裏返しとして仕立て上げられる、文字を必要としない「無垢な社会」「透明は共同体」とデリダが呼んでいるものに当たると佐藤は指摘する。では教育における身体はどうあるべきなのか？佐藤は「置かれた状況への反発を手がかりに『私たち』を形成していくことはできないだろうか」と述べている。

一方、菅孝行の所論は、佐藤のように身体の内的意味にまで入っていかないが、竹内のレッスンによって自己発見した人が「言葉では言えない身体の解放だ」というとき、対象化する努力を失った「あるがままの制度化された、貧しい、暗愚なからだの自己肯定を生むだけである」という。彼の身体論ではさらに解放闘争や一揆を取り扱う「暴力と身体」なども論じられている。

こうした立場からの批判はもっともだと思われるが、「あれか、これか」ではなく、レベルの異なった限定的なものとして捉えることは出来ないであろうか。例えば、心身症についてストレス源をそのままにして自律訓練などのリラクゼーションを行っても意味がないという批判もあるが、むしろ一時的にせよストレスを解消して、新たにストレス源に立ち向かう気力が出ることもあり得よう。また制度化された身体から新鮮な感性を取り戻すことが、人間本来あるべき姿を考えるきっかけになることもあろう。

例えば『沈黙の春』で環境汚染を告発したレイチェル・カーソンには『センス・オブ・ワンダー』（1992）という本もある。このことを本学の「こころとからだ」の講義で学生に感性を使うことを実技を通して啓発していただいたグラビア俊子氏から教示を受けた。氏の著書としては『新・ボディワークのすすめ』（2000）がある。

2. 個別的問題

1) 性的身体

性における心身は分かちがたく結びついており、多くの問題がある。例えばセックスレス夫婦が増加していると言われるが、これは身体的性の問題だけでなく、心理的、社会的問題が関与している。あるいはED（勃起障害）は心理的にも起きるし、身体的原因で起きたものが心理的に悩ませる。ここでは比較的最近問題になっている「性同一性障害」（gender identity disorder）について触れたい。「生物学的性別と性の自己意識・自己認知が一致しないもの」などと定義される（山内俊雄，2000）。ただし生物学的にも性別が明確でない半陰陽（インターセックス）は除く。性同一性障害の人たちは、学校や社会の様々な場面で苦痛を味わい、社会的にも理解されず、差別され、孤立化することが多い。こうした事態に対して、1997年日本精神神経学会特別委員会が診断基準と治療に関するガイドラインを作り、翌年厚生省公衆衛生審議会で審議、外科的治療についても了承した（山内俊雄，1999）。これについて当事者がカミングアウトして悩みや手術について書いた『女から男になったワタシ』（虎井まさ衛，1999）や吉永みち子の本（2000）を上げておく。一方インターセックスでカミングアウトした人も同様の悩みを書いている。その一人である橋本秀雄氏（2000）は本学の「社会福祉方法原論」での講義に対する学生の感想をその著書に収録している。

なお最近の雑誌『季刊セクシュアリティ』（2001，4号）が、「さまざまな性を生きる」という特集で同様の問題を取り上げている。また専門雑誌になるが『臨床精神医学』が2000年7月号で「ジェンダーの精神医学」を特集している。

2) 身体障害をもった人のからだ

ここでも身体障害を概観しての記述ではなく、ほんの一部に過ぎない。障害をもった人自身が書いたものとしては、先天性四肢切断という障害を持ち電動車椅子に乗った生活ながらも「毎日が楽しいよ」という乙武洋匡の『五体不満足』（1998）はさわやかな衝撃を与えたが、身体を考える手がかりにもなる。一方40代後半から四肢麻痺という中途障害をもって「足下にぽっかりと開いた暗い穴へのはるかな旅」を体験する文化人類学者マーフィの手記『ボディ・サイレント』（1987）がある。身体障害は自らの身体と直面する体験であろうが、演劇やスポーツはその身体にさらに挑戦するものであろう。雑誌『現代思想』の「身体障害者」という特集（1998）では、金満理率いる劇団「態変」、本学の学園祭にも来たことのある障害者プロレス「ドッグレッグズ」を紹介している。障害者スポーツまで広げるとまた別の世界が広がってくるが（藤田紀昭，1998）、ここまでで留めたい。もっとも「障害」ということば自体が適切かどうか再検討を要する時代になっている。

3) 改造される身体

先に述べた性同一性障害に対する外科的手術は人体改造と見ることもできる。この問題をめぐっては様々なレベルの問題がある。盛んだと言われる美容整形もその1つであろうし、またSFなどで取り扱われるサイボーグなどは人間の持つ能力を最大限に高めるために、機械部品を埋め込んだりするものである。これも最近では夢ではなく、コンピュータの進歩により、四肢の障害などの際に自分の意志を伝えることのできる義手義足の開発がなされているようである。心臓のペースメーカーなどもそれに数えても良いだろう。あるいは将来記憶装置を埋め込むことができるかも知れない、などと空想はつきない。

一方そうした機械ではなく、どの臓器にも分化しうる「万能細胞」を使って本物の内臓を作って置き換えたり、再生させることができる日も来ることと思われる（大拙博善，2000）。同様に再生しないとされる神経細胞に対して多分化能・自己増殖能をもった「神経幹細胞」を脳神経疾患に応用することも考えられる（例えば岡野栄之，2000。川口三郎，2000）。

4) 移植をめぐって

移植にまつわる問題は多々あり、脳死問題もこれを端緒にして起きている問題である。さらに移植をする際の臓器の提供をめぐって様々な問題がある。脳死後の臓器の摘出脳死体は屍体かという問題もある。また生体腎の移植をめぐって臓器売買の問題がある（栗谷剛，1999）。売買ではないが、骨髄移植を必要な子どものために、免疫学的適合性の高い次の子どもを生むことの可否という倫理的問題もある（TIMEの記事？典拠不明）。

また腎移植に関してはドナーとレシピエントの間の心理学的問題もある。とくに生体腎の場合に手術がうまく行かなかったときにレシピエントがドナーにたいして罪責感を抱いたり、心理的葛藤をもった家族メンバーからの生体移植で自分のものと思えないというような心と体の問題もある。提供された臓器により自らの同一性が脅かされるという体験はしばしばみられるという（出口顯，2001）。

5) ゲノムの時代の身体観

心と体をめぐるテーマにおいて20世紀から21世紀を截然と区別する大きな転換点が現れた。それは20世紀の科学の精華として花開いたゲノム研究である。21世紀を待たずしてヒトのすべてのゲノムの解読がなされたのだが、21世紀はその成果に基づいて、遺伝子の機能の研究ならびに応用が始まるわけである（伊藤隆司，2000）。

ところが榊（2001）によれば、実際はまだすべて解読されたわけではなくて、なお継続中だとのことである。ゲノム解読をめぐる国際協力と熾烈な競争についての詳細は彼の『ヒトゲノム』に書かれているが、まだすべてのゲノムの解読が終わらないのに、多くの人の関心はポストゲノム社会がどうなるのかという点に向かいつつある。病気と関連のある遺伝子を探し出し、遺伝子工学を駆使して健康な遺伝子と置き換えることができることになろう。

なおゲノムについて研究をしている村上和雄（1977、養老猛ほか 2000）は、人間の可能性はすべて遺伝子で規定されるのではなく、その発現（ON/OFF のスイッチ）には心理的なもの、環境（状況）の関与の可能性を指摘し、人間を超えたサムシング・グレートとの関係を説くが、その神秘的傾向を差し引いても興味深い。

一方、クローンを作る技術が開発されたときは、大きな衝撃を与えた。確かに体細胞から同じ人間が複製されるというのは、便利でもあり、気味が悪くもある。丁度西遊記の孫悟空が自分の毛から分身を作り出す話もあるが、いわば形質が同じである一卵性双生児があるのだから、事態そのものは自然界でもあることだと言える。もっとも自分の分身になるのはよほど出生直後でもなければ、兄弟や子ども、孫の世代になるわけで、環境も違えば同じ人間になるわけでもないであろう（「年齢差のある一卵性双生児」という言葉がある）。そこで自己の同一性という哲学的問題にはならないであろう。ただもし倫理的問題になるとしたら、例えば同性愛の事例でそれぞれの分身を子どもとして作って育てるような場合とか、死を迎えようとしている子どもの体細胞をクローン化したり、もっとひどいことは自分のスペアと考える場合である。

こうした新しい科学が人間にもたらす課題は倫理学上の大きな問題となる（例えば加藤尚武，1999）。

6) 老いていくこころとからだ

老化をめぐるでも、ゲノムの問題が顔を出す。人間の老化については、「普通の細胞死（ネクローシス）」と「アポトーシス」（あらかじめ遺伝子にプログラムされた細胞死）がある（田沼靖一，2001）。前者では細胞分裂が可能（分裂寿命）なのは 50-60 回までだといわれる。また田沼は再生しない心筋細胞、神経細胞についてはアポビオーシスという用語を当てはめているが、神経細胞の再生についての研究もあり、関心がもたれる。

一方こころの老化については、いわゆる記憶力の低下など知的機能としての老化については結晶性の知能と流動性の知能を分けて、後者の老化は遅いことについては周知のことであるが、流動性知能についても 60 歳くらいまで変わらないものもあるという（村田孝次，1989 など）。一方「老いの自覚」とでもいう意識の研究も興味深い。これもやや古い研究になるが、高齢になって体が老化したけれども「自分」は若い時と変わらないという高齢者の意識について述べた『エイジレス・セルフ』（カウフマン，1987）が有名であるが、老いの自覚は社会からさせられるのだという最近の正高信男（2001）の社会心理学的実験と指摘は興味深い。

病理としてのアルツハイマー型痴呆についての研究、治療薬の研究については枚挙にいとまがないので、分かりやすく書いたものとして、黒田（1998）、丸山ら（2000）の新書をあげておく。また初老期痴呆症としてのアルツハイマー病にかかった人の手記（マクゴーウイン，1993）は人ごとでない感じがするが、今後告知のしかたについて考える手がかりとなろう。

3. おわりに --- そして以下の論文への導入 ---

少し長めの読書案内のような拙い総説で恐縮であるが、一応関連の文献を紹介したことにしたい。あと「虐待をうける身体」、「隔離される身体（ハンセン氏病）」なども視野に入れたいところだが、到底まとめるゆとりがないので、いつかの機会にゆずりたい。

さて次ページ以後の論文は、まず連続講義「こころとからだ」について知っていただくため拙文を載せさせていただいた。ついで本学の相談室相談員である若山隆氏に、淑徳大学大学院で学んだ成果の一部で、学生相談に関連した部分を紹介していただいた。同じく学生相談室の非常勤カウンセラーとして来ていただいている太田宣子氏に「摂食障害について」をお願いした。そして付属高校の柴田順三氏には高校という教育現場で性に対する真摯な取り組みを書いていただいた。最後は「こころとからだ」の講義で「大学生のヒューマンセクソロジー」を担当し、「性は人権」ということを教えていただいた田中良氏に、ご多忙のところお願いして性に関する相談について書いていただいた。また参考のため氏の講義レジュメと、ご紹介いただいた参考文献を転載させていただいた。

<参考文献>

- アメリカ精神医学会 1994, 高橋三郎ほか訳 1996 『DSM - 精神疾患の診断と統計マニュアル第4版』医学書院
- アントノフスキー, A. 1987, 山崎喜比古, 吉井清子 (監訳) 2001 『健康の謎を解く』有信堂
- 粟屋 剛 1999 『人体部品』講談社選書
- メチエバトラー, J. 1990, 竹村和子訳 1999 『ジェンダー・トラブル』青土社
- Buytendijk, F. 1967 *Prolegomena einer Anthropologischen Physiologie*. OttoMuller Verlag, Salzburg.
- ドゥーデン, B. 1987, 井上茂子訳 1994 『女の皮膚の下』藤原書店
- ドゥーデン, B. 1993, 北川東子訳 2001 『女性を『脱構築』で切り刻んではならない!』雑誌『環』7巻 P.44-56
- 出口 顯 2001 『臓器は「商品」か』講談社現代新書
- フロイト, S. 1895, 懸田克躬訳 『ヒステリー研究』フロイト著作集7, 人文書院
- 橋本秀雄 2000 『性のグラデーション - 半陰陽児を語る』青弓社
- 廣松 渉 1994 『身心問題』青土社,
- 藤田紀昭 1998 『ディサビリティ・スポーツ』東林出版.
- ゴールドシュタイン, K. 1934, 村上 仁ほか訳 1957 『生体の機能』みすず書房
- グラバア俊子 2000 『新・ボディ・ワークのすすめ』創元社
- 市井雅哉ほか (編) 1999: 『特集: EMDR ...これは奇跡だろうか!』『こころの臨床』18巻第1号,
- 市川 浩 1975 『精神としての身体』勁草書房 (のち講談社学術文庫に収録)
- 市川 浩 1984 『身 の構造』青土社 (のち講談社学術文庫に収録)
- 市野川容孝 2000 『身体/生命』岩波書店
- 伊藤隆司 2000 『ゲノム時代の生物学』『科学』70巻4号 pp.263-270
- 神庭重信 1999 『こころと体の対話 - 精神免疫学の世界』. 文芸春秋 (新書)

- 貝谷久宣 1997 『脳内不安物質』講談社ブルーバックス
- 鎌田東二 1994 『身体の宇宙誌』講談社学術文庫
- 菅孝行 1981 『関係としての身体』れんが書房
- 笠原嘉 1983 『概説』岩波講座『精神の科学1, 精神の科学とは』岩波書店
- カーソン,R. 1992, 上遠恵子訳 1996 『センス・オブ・ワンダー』新潮社
- 加藤尚武 1999 『脳死・クローン・遺伝子治療』PHP 新書
- カウフマン,S. 1986, 幾島幸子訳 1988 『エイジレスセルフ』筑摩書房
- 川口三郎 2000 『脊髄損傷の神経修復』『科学』70巻6号 pp.490-499
- 河野友信ほか(編) 1999 『現代のストレス・シリーズ ~』現代のエスプリ別冊, 至文堂
- 木村敏 1994 『心の病理を考える』岩波新書
- 久保田競(編) 1995 『脳の謎(1)「こころ」は脳のどこにある,(2)』朝日新聞社文庫
- 久保田競 1998 『脳を探検する』講談社
- 栗原彬ほか(編) 2000 『越境する知1, 身体:よみがえる』東京大学出版会
- 黒田洋一郎 1998 『アルツハイマー病』岩波新書
- ルリア,A.R. 1973, 保崎秀夫(監), 鹿島晴雄訳 1978 『神経心理学の基礎 - 脳のはたらき』医学書院
- マーフィー,R.F. 1987, 辻信一訳 1992 『ボディ・サイレント - 病いと障害の人類学』新宿書房
- マクゴーウィン,D.F. 1993, 中村洋子訳 1993 『私が壊れるとき - アルツハイマー病患者の手記』株式会社DHC
- 丸木敬, 西道隆臣 2000 『人はなぜ痴呆になるのか』丸善ライブラリー
- 正高信男 2000 『老いはこうしてつくられる』中央公論新書
- 三木成夫 1983 『胎児の世界』中央公論新書
- 南淳三 1995 『考える身体と考えられる身体』雑誌特集「ボディ・イメージ」『imago』6巻1号 pp.282-292, 青土社
- 村上和雄 1997 『生命の暗号 - あなたの遺伝子が目覚めるとき -』サンマーク
- 村田孝次 1989 『生涯発達心理学の課題』培風館
- 波平恵美子 1988 『脳死・臓器移植・がん告知』福武書店
- 波平恵美子 2001 『医療人類学から見た身体』『環』7巻 pp.164-170, 藤原書店
- 二木立 1995 『脳損傷患者のリハビリテーションの全過程を克明に描いた『心の旅』』『総合リハビリテーション』20巻7号 p.637
- 岡野栄之 2000 『神経幹細胞からの神経再生のシナリオ』『科学』70巻6号 pp.481-489
- 大森荘蔵 1982 『視覚新論』東京大学出版会, 1982
- 大沢真幸 1990, 1992 『身体の比較社会学論』勁草書房
- 乙武洋匡 1998 『五体不満足』講談社
- ブリスト,S. 1991, 河野哲也ほか訳 1999 『心と身体の哲学』勁草書房
- ラマチャンドラン,V.S.ブレイクスリー,S. 1988, 山下篤子訳 1999 『脳のなかの幽霊』角川書店
- 斉藤孝 2000 『身体感覚を取り戻す』NHK ブックス
- 坂本百大 1986 『心と身体 原一元論の構図』岩波書店, 1986
- 榊佳之 2001 『ヒトゲノム』岩波新書
- サックス,O. 1985, 高見幸郎訳 1992 『妻を帽子とまちがえた男』晶文社
- シルダー,P. 1923, 北條敬訳 1983 『身体図式』金剛出版
- 高橋さきの 1997 『身体/生体とフェミニズム』, 江原由美子・金井淑子(編) 『フェミニズム』新曜社に所収.
- 竹田青嗣 1989/90 『エロスの現象学』雑誌『ORGAN』現代書館
- 竹内敏晴 1990 『「からだ」と「ことば」のレッスン』講談社現代新書
- 田沼靖一 2001 『死の起源 - 遺伝子からの問いかけ』朝日新聞社選書

- 虎井まさ衛 1996 『女から男になったワタシ』 青弓社
ワイツェッカー,V. 1940, 木村 敏ほか訳 『ゲシュタルト・クライス』 みすず書房, 1994
WHO 1992, 中根允文ほか訳 1994 『ICD-10 精神および行動の障害 - DCR 研究用診断基準』 医学書院
山内俊雄 1999 『性転換手術は許されるのか - 性同一性障害と性のあり方』 明石書店
山内俊雄 2000 『性の境界』 岩波書店
湯浅慎一 1978 『知覚と身体現象学』 太陽出版
湯浅泰雄 1977 『身体』 創文社
唯物論研究会(編) 2001 『こころとからだ』 青木書店
養老 猛 1992 『唯脳論』 青土社
養老 猛 1996 『日本人の身体観の歴史』 法蔵館
養老 猛, 村上和雄ほか 2000 『脳+心+遺伝子 vs. サムシング・グレイト』 徳間書店
吉永みち子 2000 『性同一性障害 - 性転換の朝 - 』 集英社新書